

# ドイツ語の単語”sc(h)af(t) について

On German Words” sc(h)af(t)

鹿見嶋 繁雄

桐蔭横浜大学法学部

2006 年 9 月 12 日 受理

1. 単語族辞典 / 語源辞書の記述
2. Schrader と Benveniste
3. sc(h)af(t)

## 1. 単語族辞典 / 語源辞書の記述

1998 年発刊の『現代ドイツ語単語族辞典』(August, G. Wortfamilienwörterbuch der deutschen Gegenwartssprache, Tübingen 1998) は、現代ドイツ語母語者がもつ単語の関連性を知るには最適の辞書である。しかし、語源的に同一であるべき単語を別の項目で扱うなど、現代語話者にとって煩雑な記述を避け、根幹をなす単語—「頭」(Kopf, Spitzenlemma)—と語形が著しく逸脱していない単語だけを単語族として取り扱っている。

(例 fahren「行く」は fahr- という形態をもつ 74 語のみを挙げ、fertig「終わった」、Ferge「渡し守」、porös「水・空気が通る」など語源的に関連のある単語は排除されている。それに対して、schaffen「作り出す」schöpfen「汲む」Schöpfer「創造者」は何の説明もなく同じ単語族の中に組み込まれている。

このような不明瞭な領域は語源辞書にも散見される。関連が不明であったり、説明が曖昧であったりする原因は文献資料の不足ではなく、分析そのものの精度が不足しているように思われる。

(1) Kluge (Kluge F.: Etymologisches Wörterbuch d.dt.Spr. Berlin 1975)

mhd.schäf, ahd. scāf (Russ, Charles V.J: Historical German Phonology & Morphology Oxford 1978 P.65) asächs, afrank: scāp, mnd.schāp, mnl.scaep, nnl.schaap, afries.skêp, ags. scēap, ne.sheep は、西ゲルマン人が早い時期に羊の飼育を發展させたことを証明している。東ゲルマン人 (got. は東ゲルマンに属する西ゴート人のことば) は lamm を用いている。

anord.fær, schwed.får, dän. faar はゲルマン祖語 \*fahaz, idg. \*pokos「羊毛をもつ動物」、gr. πρόκος「刈り取った羊毛」母音交替による πέκος「毛のついた羊皮」は idg.\*ōiis に遡る、この単語は nhd.Aue「母羊」に保たれている。

疑問：１．デンマーク語 (Langenscheidts Universal-Wb Dänisch 2001) の「羊」は får, ノルウェー語 (Langenscheidts Universal-Wb Norwegisch 2002) の「羊」: sau。ちなみに Sau は purke, Schwein は gris

疑問：２．この説明は nhd.Schaf の説明になっていない。

(２) Duden( Etymologie, Mannheim 1963)

・西ゲルマン語の Schaf の語源は解明されていない。

(３) Oxford(Onions, T. The Oxford Dictionary of English Etymology 1996)

・同語族の語源は知られていない。

補足：西ゲルマン語は、nhd.ne.nnl. で、東ゲルマン語は 4 C 中葉、ウルフィラ (AD311 頃～383) が翻訳した旧約・新約聖書の断片、契約書などが残っている got. では「羊」を nhd.Lamm「子羊」にあたる lamb で訳している。

ルカによる福音書 (L.) 10、3 gaggib, sai ik insandja izwis swe lambain midumai wulfe.  
行きなさい。わたしはあなたを遣わす。それは、狼の群れに子羊を送り込むようなものだ。

ヨハネによる福音書 (J.) 10、3 þammuh daurawards uslukib, jah þo lamba stibnai is hausjand, . . .

門番は羊飼いは門を開き、羊はその声を聞き分ける . . .

「羊」一般をあらわす単語は、idg.\*ōvis「母羊」、gr.ōis (散文では πρόβατον「前を歩くもの」)。got. には lat.ovis の借用として awister「羊の囲い」があらわれる。

J.10,16 jah anþara lamba aih þoei ni sind þis awistris, . . .

わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる . . .

ahd. にも lat.ovile(< ovis)「羊・山羊の囲い」を借用した euuist がある。

Tatian(Sievers, E. Padeborn 1966)

133,13 Inti anderiu scāf haben, thiū ni sint font thesemo euuist.

Et alias oves habeo, quae non sunt ex hoc ovile.

J.10,16 わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。

西ゲルマン語で、Schaf, sheep, schaap と同定できる最古の形態が出てくるのは、8 C のアングロ・サクソン語 (Clark Hall; H.G.: A Concise Anglo-Saxon Dic. Cambridge 1960) の scēap, scēp, scēp, scīp。ドイツ語では ahd.(8C)scāf。謎は、idg. と系統を異にする単語がゲルマン語で「羊」をあらわす単語としてあらわれることである。

羊	sansk.	gr.	lat.	got.	fin.	ags.	ahd.
	âviḥ	ōis	ōvis	lamb	lammas	scēp	scāf

子羊	gr.	lat.	got.	got.	fin	ags.	ahd.
	ἀρνῆν	agnus	lamb	lamb	pikkulammas	lamb	scāf

古いゲルマン語を語彙に残しているフィンランド語 (Klemmt, R.: suomi-saksa sanakirja, Helsinki 1999) を手掛かりにすれば, got.lamb が「成獣」をあらわす第一次的な形態で、「幼獣」(pikku 「小さい」+lammas 「羊」) は二次的であることがわかる。ということは, got. から ahd.400 年間の時間において成獣を表す単語 lamb が scāf, scāp に取って代わられたことを意味している。この交代にどのような「必然性」があるのかを考えていきたい。

## 2. Schrader と Benveniste

シュラーダー『インド・ヨーロッパ語族』(Schrader, O. Indogermanen, Heidelberg 1935 訳書 東京 1977 P.17～20) によると、「羊をあらわす単語は idg. の言語において一致している」という。しかし nhd.Schaf の語源にはふれていない。

以下シュラーダーが挙げる「羊」に関連する語彙

- ・ラテン語辞典 (Lewis, C.T.: A Latin Dic. Oxford 1969) 記載の『ガリア戦記』6,21 (ゲルマニー人の風習) renones の reno- は gr. *ῥυνοφορεὺς*: clad in sheepskin 「羊の皮を纏った」である。pellibus aut parvis rehenonum tegimentis utuntur (i.e. rhenobis quaesund parve tegimenta) 「獣皮や小さい皮衣を用いている」とはつまり「小さなおおい(衣服)である毛皮」とある。この reno は「毛皮を着た」のであり、sansk. uranah 「牡羊、子羊」、gr. ἀρνίον 「子羊」とむすびつく。この説明はかなり苦しい。皮であって毛皮ではない。
- ・「羊毛」 nhd.Wolle は、got.wulla, sanskt.urna, gr. *ληνός*, lat. *lana* リトアニア語 (Lietuvių-anglų kalbų žodynas, Vilnius 2003) vilna
- ・「織る」 nhd.weben は、ahd.weban, weben, gr. *ὠφαινειν* sanskt. *ūrāṇa-vābhih* 「蛛 (原義: 羊毛を織る女)」ただし、Williams, M.M.: Sanskrit-English Dic. Oxford 1922 では「臍に羊毛をもつ」とある。
- ・「家畜」 nhd.Vieh は、indg.pāśuh, lat. pecus 「羊、家畜の群れ」pecū 「羊の群れ」。シュラーダーは、この「家畜」から got.faihu 「お金」が派生したと考えている。

牧畜から商業用語への移行を単語の変遷から辿ることがシュラーダーの主張である。

ラテン語 pecus 「羊」→ pecunia 「お金」への移行はことばから了解される。ドイツ語では got.faihu 「お金」→ Vieh 「家畜」と逆の変遷を辿っている。

マルコによる福音書 (Mc.) 14,11 ユダ裏切りを企てる

ip eis gahausjandans faginonedun jah gahaihaitu imma faihu giban.

Da sie das hörten, wuden sie froh und verhießen, ihm Geld zu geben.

Qui audientes gavisi sunt: et promiserunt ei pecniam ('*ἀργυριον* 「銀」) se daturos.

祭司長たちはそれを聞いて喜びユダに金を与える約束をした。

「貨幣、コイン」(Geld, Geldstück) という訳語のついた got. に skatts がある。Kluge は nhd.Schatz の項で、got.skatts との関連を次のように述べている。

「got.skatts 「貨幣」, ahd.scaz 「貨幣、財産」, asächs.scat 「貨幣、所有物、家畜」, mnl.scatt(ti), nnl.schat, afries.skett 「財産、貨幣、家畜」, ags.sceat, aisl.skattr 「譲渡、豊富、貨幣」

Kluge は、これらの単語から語頭の s- を取り除いた kattr を ne.cattle 「牛、家畜」に強引に結びつけている。その意図は lat.pecus 「家畜、家畜の群れ、特に羊」→ pecunia 「所有物、財産、お金」という雛形をゲルマン語に忠実に当てはめたものであって、実際の文例から読み取れる意味の変遷は「お金」→「羊」である。

この Kluge 説の背景には、Tacitus : Germania(Tacitus.C.Germanis ,Düsseldorf 2001)5 の記述がある。「彼らの喜ぶところは牛の数であって、牛たちが彼らにおける唯一にして最も貴重とする財産である。」・「しかし、われわれにもっとも近く住んでいるものたちは、商取引をいとなむ結果、金銀の価値をわきまえ、われわれの貨幣のいくつかの種類を知っているのみならず、選んでこれをうけとるのであるが、内奥に住むものたちは、さらに単純な、さらに古風な、物々交換を行っている。その貨幣は古くからおこなわれて永く目に触れているもの、たとえばセッラトゥスとかビガートゥス ( serratos bigatosque) とかを貴ぶ。」

(Geld in der Antiken Welt Howgego,Chr. Darmstadt 2000, S.209 )

1.serratos (ギザギザが付いた)      2.bigatos (二頭立ての)

Victoriatos(BC211)

Denar(BC211)

Jupiter/Viktoria Tropaion

Roma/ Dioskuren



ちなみに、skatts、skattja(両替商)の語源は、lat.scenopegia,gr. σκηνοπηγία「仮庵祭」(ユダヤ教の祭り。holocaustum「全燔祭(ぜんはんさい) 獣を丸焼きにして神前に供える」「過ぎ越しの祭り」とならぶ三大祭りの一つ。エジプトを脱出したイスラエルの民が40年間荒野で天幕に仮住まいしたことを記念する祭り。本来は収穫を感謝する祭り。)

J.7,2 washun þan nehva dulþs Iudaie, so hlebastakeins.

T.104,1 Uuas uuarlicho in nahi itamali tag Iuddeno scatoselidono.

lat. Erat autem inproximo dies festus Iudeorum,scenophegia.

nhd. Es war aber nahe der Juden Laubhüttenfest.

ときに、ユダヤ人の仮庵祭が近づいていた。

got.hlepa-stakeins の hlepa は「テント、小屋」(Zelt,Hütte) であるが、後半の stakeins の語源は lat.sceno- であろう。ラテン語の語源辞典 (Maltby,R.:A Lexicon Ancient Latin Etymology,Melksham 1991) によると、この sceno- は gr. σκηνή, lat.tabernaculum「天幕、テント」とある。got. は「テント・テント」と誤訳している。

この誤解はさらに、Vulgata のラテン語 (4c 末) の mesa(古典語では mensa) を skattja で訳したことから、テントを張りカウンター (mesa) の上でモノを貨幣を使って売り買いしている場面を見て skattja「両替商」skatts「通貨名称=スカッツ」ということばを発明したものと思わ

れる。

L. 19,23 jah duhve ni atlagides þata silbur mein du skattjam? jah(ik) qimands miþ wokra galausedidjau þata.

L. et quare non dedisti pecuniam meam ad mensam, ut ego veniens cum usuris utique exegissem illam?

ではなぜ、わたしの金を銀行に預けなかったのか。そうしておけば、帰って来たとき、利息付でそれを受け取れたのに。

got.skatts は ahd.scāt と同じく、通貨単位をあらわすことばである。got.skatts の語末の -s は、Der kleine Pauly(München 1979) によると重量をあらわす単位 lat.ās で、貨幣単位として最初は 1 ポンド銅貨が使われた。当時の貨幣は重量であって、現代のように硬貨の数字ではない。

『ゲルマーニア』から約 300 年後の got. 訳聖書の時代には、貨幣経済が西ゴート族の中に広まっていたことは、faihu-friks「食欲な(金を欲しがる)」、faih-gairnei「食欲(金を欲しがること)」という単語から知られる。『ゲルマーニア』の「彼らは、金銀の所有と使用に対して、それほど執着さをもっていない」という記述は、もはや通用しない。

Tacitus が Germania で挙げている serratus は Der kleine Pauly によると「BC140～113 または 211～08 年に流通していた銀貨、特に 120 年代は大量に流通していた」。Tacitus が「古くから行われていた」とは一時代前の貨幣で、当時の価値は不明。高額でないことは Tacitus の記述から推測できる。

Pauly によると、Ulfila の時代にはコンスタンティヌス I 世(大帝)のソリドゥス金貨(solidus=got.skillings)が統一金貨として流通していた。BC209～AD215 の 400 年間基準通貨であったディナリウス銀貨(denarius)は、インフレによって、発行時の 1/100 から 1/140 に下落した。

聖書には通貨の名称がでてくる。新約聖書(成立 AD50～120 年頃)にはイエスの時代の通貨名称 ἀργύριον, δηνάριον, μνὰがある。Ulfila は、これらすべてを skatts を用いて翻訳している、と aisl. の辞典(Cleasby,Vigfusson: Icelandic English Dic. Oxford 1975)で aisl.skattr の項で述べている。

聖書を自国のことばに翻訳する場合、翻訳の時点で流通している通貨名称を使うことはない。nhd. でも、Groschen,Silbergroschen と現在流通していない通貨名称をもちいる。この方法を Ulfila も使ったと仮定すると、skatts は通貨名称でなければならない。

事実、ラベンナの聖アナスタシア教会の got. の契約書(AD551)には skillggs という通貨が書かれている。

Ik Uftahari papa ufm <el> ida handau meinai jah andnemun skilliggs · j · jah faurþis þ airh

kawtsjon miþ diakunu Alamoda unsaramma jah miþ gahlaibaim unsaraim andnemun skilliggs · rk · wairþ þize saiwe.

「わたし聖職者ウフィタハリは自筆でサインした、そして 60 スキリングスを受け取った。そして、われわれは事前にアラモド助祭とともに証書と引き換えた、そして同僚とともに値 120 スキリングスのこの沼地を受け取った。」

この教会の全聖職者が、120 シリング 8 ウンキアの負債を償却するために 180 シリングの沼地をペトルスという管理人に委託して、残額 60 シリングを現金で受け取った。この skilliggs はローマ人が金高を計算する際の基本命数である sesterius (AD95 - 6) をゴート語風に言い換えた通貨名称ではないか？

Cleasby の注釈 (Ulfila はすべての通貨を訳すのに got.skatts を用いている) は、ゴート人とアイスランド人が置かれていた地理的な条件—ローマ帝国領であるかないか—によって相違していることは自明なことである。ローマ帝国領の圏外にあった aisl. の skattr が「貨幣単位」ではなく、意味が拡大して「献納」になったのはローマ人との接触の密度の相違に還元されるであろう。

Egils Saga 70(Íslenzk Fornrit II Bd.:Egils Saga Skallagrimsson, Reykjavík 1955)

Hâqkon konungr hafði sent menn austr á Vermaland,tólf saman; ho, fðu þeir fengit skatt af jarlinum ;

「ハーコン王は東のヴェルマランドに総数 12 名の者を送った。彼らは候から献納を受け取った」

Cleasby の指摘とは異なり、got. がローマの通貨名称を用いている箇所がある。それは kintus で、lat.quadrāns をゴート語風に言い換えたもので、無価値なもの、「びた一文」の「びた」に相当する表現であろう。

マタイによる福音書 (Mt.) 5,26

amen qīpa þus: ni usgaggis jainoþro, unte usgibis þana minnistan kintu.

Ἀμεν λέγω σοι, οὐ μὴ ἐξεέλθῃς ἐκεῖθεν, \* εὖως ἂν ἀποδῷς τὸν ἐσχατὸν κοδράντην.

Amen dico tibi: non exies inde, donec redas no vissimum quadrantem.

はっきり言っておく。最後のクアドランスを返すまで、決してそこから出ることはできない。

ahd. ではこの lat.quadrāns を got.skatts を継承する単語 scāz で翻訳している。

T.27,3 Uúar sagen ih thir: ni ges thú thanne thu giltis then iugisten scāz.

つまり、got.skatts は辞書にある「一般的なお金」ではなく「通貨名称」である。ahd. ではさらに、got.skatts を phending(nhd.Pfennig) で翻訳している箇所がある。

マルコによる福音書 (Mc.) 14,5

Maht wesi auk þata balsan frabugjan in managizo þau þrija skatte jah giban unledaim.

T.138,12 bihi ni uurdit thiū salba forcoufit uidaar thriuhund pfennigon inti gigeþan.

lat.denariis nhd.Silbergroschen

「なぜ、この香油を 300 デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか」

「家畜」→「財産、貨幣」への移行の図式は『インド・ヨーロッパ語族』にも踏襲されている。

「lat.pecus から派生した pecunia(pecus+nia 縮小語尾)「貨幣」は、この語の確実に古い派生語であり、ウルフィラも、gr.ἀργύριον「貨幣」を訳すために、got.faihu=Vieh を選んでいる。しかしこの語はもう一方では語源的に gr.πέκος「刈り取ったままの羊毛」lat.pectō「毛を梳く」などと関係する。したがって「家畜」は、もとは「羊」をあらわす語が特別な意味をもったのだらうということが、わかる。しかし、その語は、印欧語族の所有する主な家畜がまだ羊からなっていて、後の時代ほど牛がまだ大きく前面にあらわれていなかったときに、はやくもそうした一般的な意味をとるにいったのであろう。」

ゴート人の飼育していた家畜が、羊から牛に移行したという歴史的事実の証明はない。gr.πέκος = got.faihu = Vieh という図式の中で、faihu が「羊」であった時期があった、という説明である。しかし、出典のある got.faihu は「お金」である。この点から出発すべきだ。

もう一人 Kluge, Schrader と同じ雛形を用いているのは, Stroh( Stroh, F.: Deutsche Wortgeschichte Bd.I S.24 Berlin, 1943) である。

「idg.\*peku-「羊毛をとる動物、羊」から派生した got.faihu には① Vieh ② ahd.fehtan「争う」がある。」

got.-ai- は [e] なので、音韻的には可能である。しかし、語根 feh につく語幹形成子音 - t - がどのような意味なのか説明がない。

結局、語源辞典の「羊」の説明が不可能なのは、印欧語比較文法を使った勝手な予断だけでことばを分析するのでは、ことばの本当の変遷を明らかにできないことがある、ということを示している。

出典の意味に忠実に、ことばの変遷を辿っていく、という方法をとっているのが、Benveniste(Benveniste、É.: Le vocabulaire des institutions indo-européennes I. Économie『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集 I. 経済・親族・社会』P. 31～56 東京 1986) である。

「家畜→貨幣」へという変遷は間違いで、実際は「貨幣→家畜」へと変遷していると、出典の分析から証明している。

「羊」をあらわす gr. の二つの単語: οἷς と πρόβατον の対立は次の解釈によって解消される。οἷς は古来からの単語、πρόβατον は κειμήριον-ἀρχιον「貴重なものとして蓄えられたモノ、財宝」(訳書の κειμήρια は辞書に記載なし) との対立から πρόβατον は「動産」(προ-βαίνειν「先を行く」) 対 κειμήριον-ἀρχιον「不動産」である。

この Benveniste の考え方の延長線上に Schaf の語源がある。skatts, skattja の例からも窺えるように、ローマの圧倒的文明がゴート人の生活全般に与えた影響の大きさはことばからも容易に察することができる。

got. の語彙は約 3,000 でその内 50 語がラテン語からの借用とおもわれる。若干を示す。

lat.ecclesia → got. aikklesjo「教会」; lat. suus「彼、彼女の、彼らの～」→ got. swes「所有、財産」; lat.arca → got. arka「金庫」; lat.caput → got. haubiþ「頭」; この lat.caput から派生したとおもわれる got. kaupatjan「びんたを食らわす」kaupon「商売をする」

### 3. sc(h)af(t)

以下音韻上 nhd.Schaf に到達の可能性のある単語を mhd. から遡っていこう。その際名詞の性は got. から mhd. まで不変であると仮定しておく。

#### 3-1 男性：schaft

mhd.

- ① Lexer(Lexer,M.:Mittelhochdeutsches Handwörterbuch,Stuttgart,1979):

1.Stange「棒」2.Stange am Speer「槍の握り」

Tristan9172 der starke eschînen schaft「丈夫なとねりこの柄」

Nibelungen129,4 sô si den stein wurfen oder schuzen den schaft

「石投げをしようと、槍で的を射ようと」

Lexer は、語源として、gr. σκάπος, lat.scāpos「円筒、幹」を挙げている。

- ② BMZ(Benecke.G.F.Müller,W.Zarncke,F.:Mittelhochdetschees Wörterbuch,Stuttgart 1990)

Speer,Lanze「槍、長槍」 schaben?「削る?」

ahd.

- ③ Schützeichel(Schützeichel,R. Althochdeutscher und Altsächsischer Glossen-wortschatz, Tübingen 2004)

sca[f]t: Geschoß「飛び道具、矢、投げ槍」、scaft:Pfeil「矢」、scaft:Pfeilschaft「矢の柄」、shaft:Speer「槍」、scaft:Stab「棒」、scāft:Stange「棒」scäfte:Wurfspieß「投槍」

got.

- ④ Holthausen,F.:Gotisches Etymologisches Wörterbuch(Heidelberg 1934)

\*skafts: Schaft「棒」> lat. scāpus「王錫」gr. σκήπων(σκήπων), σκήτρον「杖、棒」

- ⑤ Streitberg(Strcitberg,W.:Die Gotische Bibel,Heidelberg 1971)

gaskafts F.i.: Erschaffung「創造すること(特に神が)」

J.17,24 ・ ・ unte frijodes mik faur gaskaft fairhvaus.

Quia dilexisti me ante constitutionem mundi.

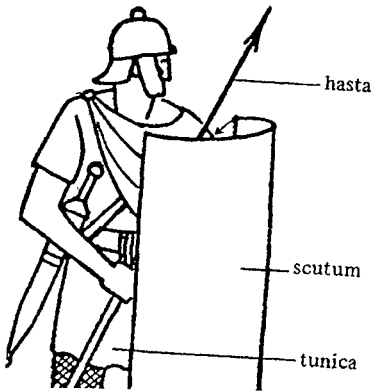
それは天地創造の前からわたしを愛し・ ・

#### 『ゲルマニア』6

「彼らの武器の有様から推して、鉄は決して彼らにありあまっていない。刀剣または長槍(maioribus lanceis)を使用するものは稀に、一般には、その呼び名において framea と称する細い短い鉄の刃の手槍を携える。」lat.lances「投槍」

これらの武器・「概念」をすべて含んだ単語に lat. hasta がある。

(„Orbis pictus latinus „Koller,H. Zürich&München 1989 S.286)



これはローマ帝国の傭兵として働いていた者がもたらしたのであろう。Der kleine Pauly はつぎのように説明している。

「1. 丸太 古代ローマ特有の武器。ローマ民兵隊の初期の長い打撃用の武器。初期は木製。先端を火で焼き固めた。後に先端は鉄でつくられた。この重い hasta と並んで軽い hasta —hasta velitaris (軽装歩兵の)— は長さ 110 ~ 170cm、太さは指一本分。鉄製の先端は 20cm。軽くて投げるのに適した hasta には投擲用の

の縄輪が付けられ、距離は 80 m まで飛ばすことができる。・・・

3. 宗教の領域で、hasta は戦の神マースを象徴している。宣戦布告のときに従軍祭官団 (Fetiales) は始めに鉄製の穂先と焼いて血塗られた握りのついた hasta を敵陣に投げた。後にはマースの後または妹であるベローナの神殿で宣戦布告を象徴する祭祀を執り行った。」

got.swes 「所有、財産」が lat.suus という所有代名詞であったように、ローマ文明に接したゴート人は、未知の概念を具体的な事象に置き換えてその概念を理解しようとした。あるいは、Ulfa がゴート人信者に対して「天地創造」とはどんなものであるかを教えるために戦闘が始まる前の儀式を「天地創造」になぞらえた。

lat.con-stitutio を翻訳している got. ga-skafts の ga- は lat. cum- 「その度に、・・・するごとに」という連続した行為をあらわす。この ga- を取り去り、道具をあらわす男性名詞に改めた単語が、Holthausen の想定形 \*skafts となる。しかしこの \*skafts は lat. scāpus 「王錫」の借用ではなく、lat.hasta をゴート語化したものだ。

Hasta :stake,steck ,hd. schaffen (Diefenbach,L.Glosarium Latino-Germanicum Darmstadt 1997)

### 3- 2 女性

mhd:Lexer ① schaf:Geschöpf 「被造物」 ② schaffe < ahd.scafa 「小船」 ③ giscaft,geschafft: was geschaffen ist,Geschöpf

① ③は got.gaskfts のもう一つの意味 lat.creatūra 「被造物、生物」だ。

got. コリント信徒への手紙 二 (k 5,17)

swaei habai hvo in Xristau niuja gaskfts, þo alþjona usliþun; sai, waurþun niuja alla.

lat. k 5,17

Si qua ergo in Christo nova creatura, vetera transierunt: ecce facta sunt omina nova.

だから、キリストと結ばれる人はだれでも新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。

ahd.T.242,2

Gét in alla uueralt, praedigot euangelium allera giscéfti; inti leret alle thíota, 全世界へ行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。

mhd.

Erec.7605 *dâ stuont diu menschliche geschacht*, 「人間の姿も見られるが」

② ahd.scafa 「小船」は明らかに lat.scapha 「軽い小船、はしけ」、got.skip n. 「船」だ。

次に述べるように、mhd. の時代に、nhd.schaffen と sch?pfen の混同 (sch?pfen 「汲む」Sch?pfer 「創造者」) が見られる。これは「妊娠」と「水汲み」がともに重労働であるという共通項から発したと思われる。

mhd. scephen (1)schaffen (2)schöpfen

(1) schaffen <形態 lat. scāpus, 意味 lat. hasta

ahd.T.5,7

sô scaffaniu( lat.praeginante) fon themo heiligen gesite.

精霊によって身ごもっている

ahd.T.145,13

Uue so scafanen ( lat. pregnantibus)

身重の女

(2) schöpfen

ahd.T.87,5

,thaz mih ni thurste noh ni queme hera scephen( lat. haurire )

渴くことがないように、またここにくみに来なくてもいいように、

ahd.T.

Quam tho uuib fon Samariu sceffen ( lat. haurire )uuazzer.

サマリアの女が水をくみに来た。

(1) の schaffen は直接 got.gaskafts 「天地創造」を継承している。(2) schöpfen (scephen、sceffen は) lat.cūpa 「大桶、樽」を借用した名詞 ahd.scaf から作った動詞である。

lat.[k] → [s] caesar[k] → fr.césar[sezar] ne.caesar[sí:zc]

lat.conquisitor → got.sokareis 「兵の募集者」

・ ahd. の接尾辞 -scaf f.

ahd. には got. にはない「群」をあらわす接尾辞 -scaf がある。これは Der kleine Pauly : hasta の項に出てくる密集方陣のことではないか？

hasta 1.・・・ローマの民兵隊は、古代ローマの中隊 (120 名:カエサルの大隊:480 名) では、第三戦列兵として重い hasta を持ち、密接方陣 (Phalaxordnung>lat.phalanx f. 密集方陣;群集、集団) をとった。・・・

これらの武器・戦術はローマの傭兵がもたらしたと思われる (cf. ズィークフリートの起源といわれている Arminius(BC18 ~ AD19) はローマ市民権をもち、ローマ傭兵として仕え騎士階級にまで達した。) (『文学にあらわれたゲルマン大侵入』東京 1974、P.15)

ahd. T.13,12 *Thô gieng zi imo Hierusolima inti al Iudea inti al thiû lantscaf umbi Iordanem.*

そこでエルサレムとユダヤ全土から、またヨルダン川沿いの地方一帯から人々がヨハネのもとに来て・・・

got.k.11,10 *is sunja Xristaus in mis, unte so hvoftuli ni faurdammjada in mis in landa Akaje.*

わたしの内にあるキリストの真実にかけて言います。このようにわたしが誇るのを アカイヤ地方で妨げられることは決してありません。

この「群」を意味する -scaf は nhd. まで継続する。ギュンタートは scaf 「様態」は schaffen 「創造する」に繋がるとしているが。(Güntert,H.Grundfrage der Sprachwissenschaft Heidelberg,1956『言語学の基本問題』東京 1967、P .115 ~ 116)

mhd. Lexer : land-schafft 1. provincial, regio

Judith 136,16 diu vil michel herchraft diu ch?rte an alle die lantschaft

すべての地方に大なる兵力をもたらした

この「群」を意味する -scaf は特殊化され「軍団」を意味する。むしろ「軍団」の方が、lat.hasta をゴート語化した skaf(t)s の二次的な意味(「戦術としての密接方陣」)を伝えているかもしれない。

ahd.

T. 185,5 oda zuelif thusunta engilo herriscefi?( got.laigaion lat. legio「軍団」)

十二軍団以上の天使

mhd.Lexer Tristan 4047 her-schaft → nhd.Heerschar

man sach in mit hêrlîchen sîten vor al der hêrschefte stân.

人々は彼が立派な態度で、騎士たちの前に立っているのを見た。

Tristan 4280 hêr-schaft → nhd. Herrschaft

Diu meiste triuwe die dehein man ze sîner hêrschefte ie gewan

人がその主人に示した最大の忠誠

nhd.Schar「軍団」について Kluge ( Etymlogisches Wörterbuch) には、lat.cārō「動物の肉」とある。出典のある単語では、Schützeichel(ahd.asächs.Gl.Wschz) には schar:Schere「はさみ」がある。

### 3- 3 中性

mhd. Lexer : schaf n.l. 液体を入れる容器 (Gefaß für Flüssigkeit, Getreidemaß)

2. 小船 (kleines Boot)

ein schaf voller lougen 魚で一杯の樽 (Minnesinger Leipzig 1838 3,197)

kornschaf 穀物の目方

winschaf ワインの量目

scheffel m. < schaf n. 1. 小さな容器 2. 穀物の量目 (目方)

ahd. Schützeichel: scaf n. < lat. cūpa 大きな

木製の容器、桶、甕、バケツ

schaf: Bütte ( 桶 )

schaf: Gefäß ( 容器 )

scap: Gestell ( 台、棚、骨組み)

scáp: Geschirr ( 食器 )

saph: Schrank ( 戸棚 )

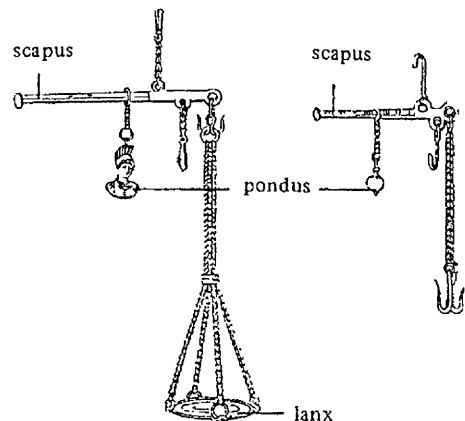
saph: Trinkgefäß ( 飲用の容器)

scaf: Waage ( 秤 )

schaft: Badewanne (風呂桶)

mhd.ahd で目方・容器は、lat.scāpus「天秤棒」がその由来である。

(Orbis pictus latinus: Koller,H. Zürich& München1989 419)



scâp+ 抽象名詞を作る -ti 語幹の女性語尾 (Die Elementar des Gotischen Kluge,F. § 106 Berlin/ Leipzig 1921) skaf+t+jan 「mhd.vluht,zuht 型の女性語尾 -ti は抽象名詞 : gabaúrþs (Geburt), fralusts( Verlust ),andahafts ( Antwort )」  
got. skaft-jan 「・・・するつもり」 (Streitberg: sich anschicken Stamm: in Bereitschaft setzen, sich anschicken, sich bereit machen)

J.12,4 qab þan ains ize siponje is, Judas Seinonis sa Iskariotes, ize skāftid(skaftjan 過去)  
sik (ὁ μὲλλων αὐτον παραδιδόναι) du galewjan ina.

Da sprach seiner Jünger einer, Judas Ischarioth, der ihn danach verriet.

弟子の一人で、後に裏切るイスカリオテのユダが言った。

ゴート語の skaftjan は「量る」でなければならない。事実、「羊」の売買の「基準」は成獣で、子羊の値段は幅がある。

Szaivert,W: Löhne,Preise,Werte ,Darmstadt 2005 S.71)

καὶ λαγῶ, τῶν δ' ἀρνῶν τριῶβολον καὶ τετρώβολον ἡ τιμὴ. ὡς δὲ πίων ἐκατόν μνᾶς ἂ γων

πέντε δραχμῶν καὶ πρόβατον δρεῖν .

Lustitanien (ポルトガル北部) 地方の豊穰 (BC 2 半ば)

「・・・子羊は 3～4 オーボロス、100 ミーネ (約 43kg) の太った野豚 5 ドラクマ、羊 2 ドラクマ・・・」

成獣 2 ドラクマに対して幼獣の価格が 3～4 オーボロスと安定しないことが窺われる。

食肉売買の基準としては、何故か幼獣が成獣の 1 / 4 ～ 1 / 3 であること、成獣の値段が定まっていることに、なんらかの基準があるものと思われる。

(Szaivert,W. :Löhne,Preise,Werte S.22)

Drachme	Obol
4.36g	0.72g
6000	36000
100	600
4	24
2	12
1	6
	1

また、lat.hasta (Der kleine Pauly) の 3 番目の意味「法的に見ると、hasta(festūca 幹、権杖) は百人法廷 (centumviri)、公的な競売、売買において支配者の正義のシンボルの役割を果たした。

Got.N. skufts Haupthaar > Schopf 「頭頂、頭頂の毛総」

J.11,2 wasuh þan Marja, soei salbonda farujan balsana jah biswarb fotuns is skufta  
seinamma, þizeizei broþar Lazarus siuks was.

Maria aber war es, die den Herrn gasalbt hat mit Salbe und seine Füße getrocknet mit ihrem Haar.

このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐった女である。

文献

- (1) Kluge, F. : Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache , Berlin 1975
- (2) Russ, Charles V.J. : Historical German Phonology & Morphology, Oxford 1978
- (3) Langenscheidts Universal-Wörterbuch Dänisch 2002
- (4) Langenscheidts Universal-Wörterbuch Nowegisch 2002
- (5) Duden, Etymologie, Mannheim 1963
- (6) The Oxford Dictionary of English Etymology, Oxford 1996
- (7) Streitberg, W.: Die Gotische Bibel, Heidelberg 1971
- (8) Sievers, E.: Tatian, Paderborn 1966
- (9) Clark Hall, H.G.: A concise Anglo-Saxon Dictionary , Cambridge 1960
- (10) Klemmt, R.: suomi-saksa sanakirja, Helsinki 1999
- (11) Schrader, O.: Indogermanen, Heidelberg 1935 『インド・ヨーロッパ語族』 東京 1977 P. 17 ~ 20
- (12) Lewis, C.T.: A Latin Dictionary, Oxford 1969
- (13) Williams, M.M.: Sanskrit-English Dictionary, Oxford 1922
- (14) Tactus: Germania, Düsseldorf 2001
- (15) Howgego, Chr.: Geld in der Antiken Welt, Darmstadt 2000, S.209
- (16) Der kleine Pauly, München 1979
- (17) Cleaby, Vigfusson: Icelandic English Dictionary, Oxford 1975
- (18) Egils Saga Skallagrimsson 70, Íslezk Fornrit II Bd. Reykjavík 1955
- (19) Stroh, F. : Deutsche Wortgeschichte Bd.I S.24 Berlin, 1943
- (20) Benveniste, É.: Le vocabulaire des institutions indo-européennes I. Economie 『インド = ヨーロッパ諸制度語彙集 I. 経済・親族・社会』 P.31 ~ 56 東京 1986
- (21) Lexer, M. : Mittelhochdeutsches Handwörterbuch, Stuttgart, 1979
- (22) Benecke, G., Müller, F., Zarncke, W.: Mittelhochdeutsches Wörterbuch, Stuttgart 1990
- (23) Schützeichel, R.: Althochdeutscher und Altsächsischer Glossenwortschatz, Tübingen 2004
- (24) Holthausen, F. : Etymologisches Wörterbuch, Heidelberg 1934
- (25) Koller, H. : Orbis pictus latinus, Zürich & München 1989 S.286
- (26) Courcelle, P. : Histoire Littéraire des grandes invasions Germaniques 『文学にあらわれたゲルマン大侵入』 東京 1974 P.15
- (27) Güntert, H. : Grundfrage der Sprachwissenschaft , Heidelberg , 1956 『言語学の基本問題』 東京 1967 , P. 115 ~ 116
- (28) Szaivert, W.: Löhne, Preise, Werte, Darmstadt 2005 S.71)